

二 事實——（社会主義におけるユートピア的要素）

人類の精神史に登場したもろもろのユートピアには一見して共通のものが現われている。それはこれらのユートピアが像、しかも現実には存在しないでただ表象されるにすぎない何かについての像であるということである。そうした像は一般に幻想像と名づけられるが、しかしそれではまだ少ししか語られていない。その幻想は、ふらふらさまよっているものでもなければ、変り易い感興のままにあてどなくゆり動いているものでもない。それは第一義的かつ本源的なあるものに構造的にしっかりと中心をおき、これを建設することをもってみずからの課題とするところのものであって、この第一義的なものとは願望なのである。ユートピア的像は「あるべき」ところのものについての像であり、そうした像を描く者はそれが存在することを願望する者なのである。また人びとはよく願望像を口にする。しかしこれとても十分には語っていない。「願望像」によって私たちが考えるのは無意識の深みから起り、そして夢とか幻想とか「発作」とかの形で無防備な魂を襲い、後では魂自体の方からそれをよびよせたり、それに助言を求めたり、工夫を加えたりするであらうような何かである。精神史上における像形成のユート

ピア的愿望は、すべての像形成のように、よしそれが心の奥底に根ざしているにしても、衝動的な何ものでもなければ、自己満足的な何ものでもない。この愿望は、魂と親しく通じながらもそれに制約されはしない超個人的なものと結合している。そこに働いているのは、宗教的または哲学的想念において、啓示または理念として体験され、そして本質上、個々人のうちにはなく、人間的共同社会（*グロウパ*、共同体）自体のうちにおいてのみ実現されうところの、かの正しきものへの渴望なのである。存在すべきものについての想念は、時には個人の意志から全く独立しているかのように見えるけれども、人間世界の現状にたいする批判的な根本の關係からひき離されることはできない。不条理な秩序について抱く苦悩が下地となつて、こうした想念を魂に生み、魂がこの想念から受けとるものが、倒錯した物事の背理にたいする洞察を強めかつ深める。想念されたものの実現への渴望こそは、かのユートピア像を形成するのである。啓示における正しきものへの想念は完成した時間の像のうちに、すなわち救世主的終末論として完成する。理念における正しきものへの想念は完成した空間の像のうちに、すなわちユートピアとして完成する。前者は本質上社会的なものを越えて被造的な、それどころか宇宙的なものに接する。後者は、時としてその像のうちに人間の内面的変革を含むにしても、本質上社会の範囲に限られている。終末論は創造の完成を意味し、ユートピアは、人々の共同生活のうちに宿る「正しい」秩序の可能性の展開を意味する。いま一つの相違はさらに重要である。

終末論にとっては——よしその原初的預言者の形態では人間を励まして贖罪の到来への重要かつ積極的な参加に赴かせるにしても——決定的な働きは天上（神）から生起する。ユートピアにとっては、すべてが自覚せる人間意志によって支配される。それどころか、まさしくユートピアは、あたかも自覚せる人間意志以外のいかなる要因もそこに存在しないかのように考えられる社会像として特質づけられることができる。しかし両者は雲のなかに浮んでいるのではない。それらは、それを聴きまたは読む者に自己の現状にたいする批判的關係を喚起しあるいは強めるとともに、実に絶対者に照しての完成を、しかもそれに向つて彼の現状から能動的な途が通じているところのものとして指し示そうとする。そして概念としては不可能とも見えるものが、ユートピア像としては信念の力を鼓舞し、目的と計画とを定める。そうしたことが行われるのは、それが現実の深みに潜むものるものに結びついているからである。終末論は預言者的である限り、ユートピアは哲学的である限り、現実主義的な性格をもつのである。

啓蒙時代とそれにつづいて起つた出来事は、宗教的終末論からその活動領域をいよいよ多く奪い去つた。十世代のうちに、将来のある時点において天上からの働きが人間を救済し、不調和なものから調和あるものに変えるであらうと信ずることは、人間にとってますます困難となつた。このことは、宗教の信仰を公言する人たちにおいても、非宗教的な人たちに劣らず、往々にして全くの肉体的無能力ともなっており、ただそれがなおちつづく伝統的關係によって意識

からかくされているにすぎない。他方機械的技術と続発する社会的矛盾との時代は、ユートピアに深刻な影響をおよぼした。汎技術的な精神的傾向の影響の下に、ユートピアもまたしばしば全く技術的なものとなった。古くからユートピアの基礎をなしてきた自覚的な人間意志も、いまは技術的なものとして理解され、社会も自然と同様に技術的計算と技術的構成とによって克服せられるべきである。しかるにいまや社会は、そのもろもろの矛盾において避けることのできない問題として人間の前に立ち現われてきた。将来についてのあらゆる考と計画は、この問題への解答を求めなければならないし、ユートピアにおいてもまた必然的に、政治的および文化的形成の如きは、社会の「正しい」秩序を考え出すという課題の前には、後退することになる。しかしここでは社会的思考は技術的思考にたいして優越した地位を示している。技術的幻想をこととするユートピアは、多くは甚だしくみすばらしい類の小説になお見られるにすぎないし、そこではかつての偉大なユートピアがもつ構想力といったものはほとんど見出されようもない。これにたいして、完全な社会構成の見取図を提供しようと企てるユートピアは体系に変じている。しかしこの「ユートピア的」社会体系のなかに、追いのけられた救世主義のすべての力がはいりこんでいる。近代の社会主義および共產主義の社会体系は、終末論と同様に告知ないし呼びかけの性格を帯びている。すでに、プラトンがイデアに合致する現実をうち立てようという渴望に動かされたことはたしかであり、また彼がその生涯の終りまで衰えること

のない情熱をもってその実現のための人間的用具を探究したことも本当である。しかし近代の社会体系と共に初めて教説と行動、計画と実験との緊密な関係が結ばれた。トマス・モアにおいてはまだ真面目な教訓と気まぐれな冗談とをいっしょにしたり、「馬鹿げきった」諸制度と彼が模倣されることを「望むというよりもむしろ願っている」諸制度とを人もなげな皮肉をもつて、代る代る叙述することがなお可能であった。フリーエにとってはそうしたことはもはや許されなかった。彼においては一切が実際の推論であり、また論理的解決である。なぜなら、フリーエにおける問題は、「人間の社会的宿命であるどころか、たんに人類の小児病でしかない」「文明から最終的に脱出する」ことであつたからである。

マルクスおよびエングルスが行った影響するところきわめて大きい論争の結果として、「ユートピア的」という呼び名はマルクス主義の内でも外でも、生産関係の内部ですでに弁証法的に準備されているものを積極的意識をもってただ取りあげる代りに、人間の理性や正義や意志に訴えることによって支離滅裂な社会を調整しようとする社会主義にたいして用いられることになった。いまやすべての主意主義的社会主義がユートピア的と見なされている。といつてもこれに對立する社会主義、発展的必然性を実行に移すこと以外に、何事をも求めないと言明するのであるから、必然論的とよぶことのできる社会主義が、決してユートピアにとらわれていないということにはならない。もちろんそのなかに含まれているユートピア的要素は別種のも

のであり、またその関連をも異にするのである。

退位させられた終末論のすべての力が、フランス革命の時代にユートピアのうちに置きかえられたことはすでに指摘した。しかし終末論には、さきにもほのめかしたように、二つの基本的形態が存在するのである。すなわち呼びかけられた一人一人の人間の決断力に、あらゆる瞬間にまた確定すべくもない度合において贖罪を用意させるところの預言者の形態と、贖罪の過程がその瞬間および経過のあらゆる詳細にわたって太初から決定されており、よし不動に確定されている事柄が人間にあらかじめ「打ち明けられ」啓示されるにしても、人間はそれを成就するためにただ道具として用いられるにとどまり、人びとにそれぞれの職能が指し示されているところの黙示録的形態とである。これら二つの形態のうち、前者はイスラエルに、後者は古代イランに由来する。両者の論争、和解、混交および分離こそはキリスト教内面史の重要な一章をなすのである。それらは終末論の社会主義的世俗化においても別々に働いている。すなわち預言者の基本形態は所謂ユートピストの体系のいくつかのうちに、黙示録的基本形態はとりわけマルクス主義のうちに。(といってもマルクス主義に何らの預言者の要素も入っていないというのではない。ただそれが黙示録的要素に圧倒されているというのである。)矛盾を通しての矛盾の克服という人類の進路にたいする信念が、マルクスにおいては生産過程の変化についての科学的研究を利用しているために、ヘーゲルの弁証法の形をとることになる。しかし、

ヘーゲルのいわゆる「絶対的必然性の連鎖」を来るべきまた既に起ってしまった変革と認めることを、ヘーゲル自身はあえて主張していない。マルクスの基本的な黙示録的立場は、未来にたいする本来の衝動を欠くヘーゲルの立場よりも純粹でありかつ強力である。フランツ・ローゼンツヴァイクは正當に、マルクスが、歴史的運命にたいするヘーゲルの信念を、ヘーゲルにもまして忠実に守ったことを指摘した。「マルクス以外の何人も、最後の日がどこで、どのように、またどのような形で歴史の空に明けそめるかを眼のあたりに見はしなかった。」マルクスにおいては、ユートピア化された黙示録が示現し、すべての経済的科学的現実問題が純然たる非現実問題⁽¹⁾になる時点は、社会革命後においてあらゆる物事が一変する時である。いわゆるユートピストたちのユートピアは革命前であり、マルクス主義のユートピアは革命後である。「国家の死滅」とか、「必然の国から自由の国への人類の飛躍」とかは、なるほど弁証法的には根拠づけられるかも知れないが、科学的にはもはや根拠づけられはしない。そうしたことは、マルクス主義的思想家パウル・ティリッヒが⁽²⁾いうように、「与えられた現実からほどのようにしても理解できないし」、「現実と期待との間には深淵が横たわっており」、「この理由でマルクス主義は、そのユートピアへの敵意にもかかわらず、それ自身のかくされたユートピア信仰にたいする疑いを決して払いのけることはできなかった。」あるいはいま一人のマルクス主義的社会学者エドゥアルト・ハイマンの言葉でいえば、⁽³⁾「現にある通りの人びとからすれば

国家の死滅など考えることはできない。われわれは、人間性の内面的かつ根本的な変化を当に
して、経験的研究の限界をこえて予言的直観の領域に入りこみ、そこでは人間の真の意義や振
理的使命が口ごもった譬喩に書き変えられているのである。」しかしわれわれにとって決定的
な意味をもつのは、このようなユートピア主義と非マルクスの社会主義者のユートピア主義と
の相違である。この相違をもっと詳細に考察しなければならぬであらう。

われわれは、マルクス主義からの批判が非マルクス主義の社会的教説におけるユートピア的
要素として指摘するものを検討するとき、それが決して単純なもの、画一的なものではないこと
がわかる。明らかにちがった二つの要素が区別されなければならない。一つの要素の本質は図
式的虚構であり、他の要素の本質は有機的計画である。とくにフリーエにおいて出会う第一の
ものは、人間の本質とその能力および欲求についての理論から、あらゆる能力を活用し、あら
ゆる欲求を満たすべき社会秩序をひき出すところの、多少抽象的な想像力から発している。フ
リーエの場合、なるほどその理論は多くの観察資料に支持されているけれども、この社会秩序
の領域に入るやいなや、あらゆる観察が非現実的な、信頼しがたいものとなる。そして社会的
建築と称しているが、実は無定形な図式である彼の社会秩序においては、フリーエ自身いっ
ているように「すべての問題が同一の解決」をえている。すなわち問題が、人びとの生活にお
ける問題から衝動的自動機械の存在過程における見せかけの問題に、同一の機械的配列から起

る以上、同一の解決を許すところの見せかけの問題に変えられている。第二の要素はこれと全
く異なる、いな正反対な性質のものである。ここでは、われわれの社会秩序の本質を構成する
ものもろの矛盾を克服するため、現在の人間と現在の事態とについてのとらわれない、非独断
的な認識から出発して、これら両者の変改を開始しようという意図が働いている。この精神的
傾向は、無条件に現在の社会状況の事実に出発点をとりながら、いかなる独断的気まぐれにも
迷われない透徹した眼をもって、まさしくかの変改を目ざすところの、現実の深みのうちに
いまもかくされ、他の顕著な力強い傾向によってなお不分明にされているものもろの傾向に着
目するのである。あらゆる計画的な知性は積極的な意味においてユートピア的であると正当に
もいわれた。さらにここでの社会主義的「ユートピスト」の計画的知性は、あらゆる時代に認
めることのできるものもろの発展傾向の多様性、その相反性をも逐一知り、あるいは少くとも
それに気づくことにおいて、現に支配的な諸傾向を洞察しながらそれらにかくされた他の諸傾
向を見落すことなく、まさにそれらの傾向こそは現存社会の矛盾を真に克服するであらうよう
な秩序を目ざしているかどうか、またどの範囲にまでそうであるかを問うことにおいて、まさ
しくその積極的ユートピア主義を確証しているのである。

いま述べたことのなかには、それ自体として、またそれをマルクス主義から区別するために
も、さらに説明と補足が必要とするいくつかの契機が含まれている。

いわゆるユートピア社会主義が発展して行くうちに、その指導的な代表者たちの間には、社会的問題の立て方にしてもその解決にしても、一つの公分母に還元され得ないこと、あらゆる単純化が、精神的にはきわめて意味のあるものでも、認識と行動とに共に不利な影響を与えるという確信がいよいよ強くなった。一八四六年マルクスが、ブルードンに対する反駁書に着手するほぼ半年前に、「思想の交換と非党派的批判」に役立つべき「通信」（共産主義者通信委員会）、そしてそれには「フランスであなたにまさる通信者はほかに誰も見つけられないと私たちはみな信じています」とマルクスが書いた「通信」に協力することをブルードンに求めたとき、マルクスは次のような返事を受け取った。「お望みでしたらいっしょに社会の法則やそれが実現される仕方を研究しましょう。けれども私たちがこれらア priori な独断論をすべて一掃した後では、ぜひともこんどは私たちの方で民衆を教義のなかにまぐるめこむことなど考えないようになしましょう。カトリック神学を転覆してからすぐ破門と呪詛の大騒ぎの最中に、プロテスタント神学をうち建てることにとりかかったお国のマルティン・ルターの矛盾には陥らないようにしましょう。……私たちは運動の先頭に立つからといって、自分たちを新しいイントレランスの主役にしたり、よし論理の宗教、理性の宗教であるにしても、新しい宗教の使徒として振舞わないようにしましょう。」⁽⁴⁾ここでは主として政治的手段が問題となっているが、しかし多くの立言からして、ブルードンが目標についても同じ自由と多様性との見地から考えていた

ことは明らかである。この手紙から五十年後にクロポトキン^{フョードロ・ミハイル・ポポフ}は、目標についての基本的見解を次の一文に要約した。個性の最も完全な発達が、「あらゆる面における、あらゆる可能な度合における、そしてあらゆる可能な目的のための自発的な結社、自らのうちに永続の諸要素を含み、またいかなる時にもすべての人々の多様な努力に最もよく対応する形態をとりながら絶えず変化して行くところの結社の最高度の発展と結合」すべきである。これこそは、まさにブルードンがその円熟した思想においてすでに欲したところである。これにたいし、マルクス主義の究極目標もまた本質的にはこれと異なるものではない、という異論がだされるかも知れない。しかしまさしくここに、一方の、将来いつか革命が最終的勝利を収めたのち、誰にも分らぬ遠い先に成就される変化と、他方の、革命にいたるまでまた革命をつうじてとられる手段、いかなる特殊の見解いかなる特殊の発意をも容赦しない完全な中央集権主義を特徴とする手段との間には、かの特殊なマルクス主義的ウートピークによってのみ架橋することのできる深淵がうち開いているのである。手段としての画一性が不思議にも目標としての多様性に、手段としての強制が不思議にも目標としての自由に一変するという。これにたいして「ユートピア的」な非マルクス主義的社会主義は、目標と同じ性質の手段をとろうとする。それは、将来の「飛躍」を当にして、追求することとは逆のことを準備しなければならないと信ずることを拒否する。それはむしろ、追求する事柄にとっていまここで現在可能な場所をつくりだし、かくしてそれ

がのちに実現されるようにしなければならないと信ずる。それは革命後の飛躍を信ぜず、革命的連続を、もっと正確に言えば、革命とはその内部ですでに可能な限度にまで発展している現実の成就、解放および拡大を意味するにすぎないような連続を信ずるのである。

このちがいは、別の側面から見るとき、もっと明らかになるであろう。われわれは、社会主義が発生した資本主義社会をその社会としての性格について検討するとき、それが構造的に貧困な、しかもいよいよ貧困になりつつある社会であることを知る。社会の構造とは社会の内容、共同体的な内容の意味に理解すべきである。社会は、真の諸社会、すなわち地域のおよび仕事の共同体とその順次の連合とから構成される度合に応じて、構造的に豊かであるということができる。ギールケが中世の団体的結合運動についていっていることは、あらゆる豊かな構造の社会についても真理である。すなわちこの運動は「団結の増大と拡張への傾向、よりせまい団体を超えたより広い団体の、個々の結合を超えた連合の、個々の連合を超えた総連合の形成への傾向によって特徴づけられる。」このような社会の構造では、それをどの個所でしらべようと、われわれはいたるところに「社会」という細胞組織、すなわち生きた協力の存在、広範囲に自律的な、内部から自己を形成し変形して行く人びとの共同生活を見出すのである。社会はまさにその本質からして分離せる個々人からではなく、結合単位とそれら単位の連合とから成るのである。このような社会の本質は、資本主義経済とその国家との強圧によってますます

空洞化され、かくして近代の個人化の過程は原子化の過程として完成した。それと共に、古くからの有機的諸形態の多くは、外面的には存在を保ちながらも、意義と精神においては空虚となり、衰頹しゆく組織となった。たんに人々が大衆とよびなれているものだけでなく、社会全体が本質的に無定形、無分節であり、構造的に貧困なのである。それにたいしては、経済的または精神的関心の合致から生れるものもろの団結、その最も有力なのは政党であるが、これらとても助けにはならない。それらの団結における人々の交渉は、もはや生きたものではなく、人々がそこに求める、失われた共同体的な形態を補うべきものとしては、何一つ見出しえないからである。「社会」をしてそれ自体一つの矛盾たらしめるこのような状態に直面して、「ユートピア」社会主義者たちは、いよいよもって、社会の構造的更新を追求した。——それは、マルクス主義的批判者たちが考えるように、片のついた発達段階を復活しようというようなロマンチックな企てではなく、むしろあらゆる経済的および社会的生成の深みに認められる分散主義的な反対傾向と結びつき、また人間精神の内奥に、徐々に成長しつつある最も内面的な反抗、大衆化的もしくは集団化的孤独にたいする反抗とも結びついていることなのである。

ヴィクトル・ユーゴーはユートピアを「明日の真理」と呼んだ。ユートピア的社会主義と呼ばれ、一見時代おくれなもののように宣告された精神の努力こそは、おそらく将来の社会構造

を準備するであらう。——それ自体として必然的な、人間決意の力から独立した歴史過程などは存在しない。ここでもまた明らかに、なお保持されている共同体的な形態を維持し、それに新しく精神を満すこと、しかも新しい精神を満すことが問題なのである。マルクス主義的の中央集権主義の入口にはかつてエンゲルスが大工場における自動機械化の抑圧的性格を要約してゐた *Lasciate ogni autonomia voi, ch'entrate* (一切の自律を棄ててここに入れ) という銘が、いつ終るかわからない期間にわたってかかげられるであらう。「ユートピア」社会主義こそは、社会の構造的更新の埒内で、時々可能な最大限の共同社会的自治を獲得するために闘うのである。

一九二八年のある社会主義者大会で私はいった。「人間対人間の現実の生活が少ししか変わらないところでは、社会主義の虚偽な実現が存在しうるにすぎない。人間と人間との現実の共同生活は、人々がその共同生活に関する実際の物事を共に経験し、協議し、管理するところ、現実の近隣関係、現実の作業組合^{ヴゼンツダイト}が存在するところのみ、発展することができる。われわれはおそらくロシアにおける実現の企てから、人びとの関係は、それが個人の生活および自然的社会集団の生活を規制する社会主義的中央集権主義的権力秩序のなかにはめこまれるときには、本質的に変わらないままであることを知るであらう。もちろんわれわれは原始的農業共産制やキリスト教中世の身分制国家に逆戻りすることはできないし、またそれを欲するものでもない。われわれは全く非ロマンチックに、全く現在に生きながら、われわれの歴史的時代の反抗的な

材料をもって真の共同社会を建設しなければならない。」